

子どもプロレス

昭和五十七年度 三年 男児

「ジャーン。子どもプロレスがはじまったぞー。」

日よう日の昼すぎからぼくと、ゆたかくん、つとむくん、ひとしくんの四人で「子どもプロレス」をしました。ゆたかくんは、「あつしくん、ぼくたち二年生だがらって、よわぐやんねぐったっていいさげの。」と言い、自信まんまんのようです。ぼくは、

「ほんとにいいのかな。」と思い、少し心ぞうがドキドキしてきました。

ぼくは、黒ひょうマスク。ゆたかくんはタイガーマスク。つとむくんは、ジャンボつる田。ひとしくんはアントニオの木。人気スターが子どもになって、オールスタープロレスだ。しんぱんは弟の太一だ。太一は、いつもプロレスをして遊んでいるから、みんなでしんぱんに選んだ。

「カーン。」ゴングが鳴った。太一が、アルミでできてい

るふで入れをえんぴつでたたいたのだ。ジャンボつる田とアントニオの木のたい決だ。ゴングと同時に二人ともリングのまん中で組み合ったままだ。そのうちに、ジャンボつる田は、

「どうじがためだー。」と言って、おなかを両足ではさんだ。いの木は、がまんしきれなくなってやられてしまった。ぼくは、すぐたおすとはだいぶ強いんだなあと思った。

でも、次のタイガーマスクには、どうじがためはきかなかつた。ただ、タイガーマスクは、

「そんなのいたくないよ。」と言った。どうじがためのま

まずつと勝負がつかなかったので、ひとしくんが、「いつなつても勝負つかないのなら、ひきわけだ。」と言った。しんぱんの太一が、ひきわけだと言おうとした時に、タイガーマスクが急に、

「ピラミッドサンダークロスだ。」と言って、ジャンボつる田をたおした。ぼくはすぐ、

「どごいでけ。」と、つとむくんに聞いたなら、

「せ中のはじつこのところだけ。」と言ったので、ぼくは「なんてすごいわざなんだろう。」と思った。

次は、いよいよぼくの番だ。今勝ったタイガーマスクとするので、ちょっとこわかった。しんぱんが、ゴングを鳴らす。ぼくは、ゴングと同時に、ドドドッといあたりでっこんだ。タイガーマスクも、ぼくに負けないくらいの勢いでっこんできた。ドスン。ぼくとタイガーマスクは、おたがいに腹を打ち、苦しくもがいている。しんぱんが、たおれている二人のまん中に立ち、カウントをとった。

「ワン、ツー、スリー、……。」と、しんぱんの声。ぼくは、立ち上がろうとおなかをおさえてがんばった。でも、とうとう二人とも立てなかった。

このたい戦は、ひきわけだ。ぼくは、くやしかった。

「ゆたかくん、だいぶつえけの。」と言ったら、

「たいあたりさねば、ずっと続いたなさの。」

と、言いながら、ゆたかくんもくやしそうだった。

ぼくは、この次の子どもプロレスでは、ぜったい勝負をつけようと思った。